

朝晩と日中の寒暖差が日増しに激しくなってきました。体調には十分に配慮しなくてはならない季節であるとともに、何をするにも気持ちの良さを感じる季節でもあります。「〇〇の秋」としたときに、〇〇にはどんな言葉を入れるでしょうか。コロナ禍における“巣ごもり”の効果もあってか、本を読む時間が増えたということから「読書の秋」がふさわしいでしょうか。そこで、「読書の秋」にちなみ、書棚から5冊の本を紹介します（改めて読み返しました）。

「読書の秋」に寄せて

1. 『銀河鉄道の夜』（宮沢賢治）

童話作家、詩人である宮沢賢治の代表作の一つ。孤独な少年ジョバンニが、友人カンパネルラと銀河鉄道に乗って美しくも哀しい夜空の旅をする物語。不思議な哀しみの影をたたえた乗客たちは何者なのか？ 列車はどこへ向かおうとするのか？ ジョバンニが「ほんとうの幸せ」とは何かを探し求め、語りかける。物語の結末は読者の想像に委ねられてるが、それは、賢治の没後に未定稿で紹介されたからであり、それがゆえ、読むたびに深い余韻が残る作品でもある。90年近くも前の作品だが、古さを全く感じさせないのはなぜなのだろうか。不朽の名作と言える。

国語教科書では『注文の多い料理店』が扱われることが多いが、是非とも読んでおきたい一冊。小学生高学年～大人まで、幅広く読める物語である。これまでどれほど読み返したことがか。

2. 『半七捕物帳』（岡本綺堂）

時代推理小説。江戸時代の末期、岡っ引きとして活躍した半七老人が、若い新聞記者を相手に語る昔話。功名談の中に往時の世相風俗を伝える連作推理。その第一話「お文の魂」が発表されたのが大正6（1917）年。以来、20年間に綴られた68編の捕物帳は、多くの読者を魅了し、後世の作家に影響した。

巧みなまでの文体、時の経過を忘れてしまうほど惹きつけられる見事な展開力は、他の推理小説の追隨を許さないものがある。推理小説の手本と言えるのではないだろうか。

3. 『マタギ』（矢口高雄）

知る人ぞ知る漫画家・矢口高雄の代表作。マタギとは熊などの大型獣を捕獲する技術と組織をもって狩猟を生業としてきた人たちを言う。物語の舞台は、東北・奥羽山脈の山里。不条理とも思

える大自然の掟の下、狩人である

マタギたちは冷徹な頭脳と研ぎ澄まされた狩猟技術をもって野生動物に向かっていく。マタギの伝統的な狩猟作法や山にまつわる伝承など、民俗学的な考証に基づいて描かれており、その方面でも興味・関心がそそられる漫画である。

4. 『あん』（ドリアン助川）

「町の小さなどら焼き店に働き口を求めてやってきたのは、徳江という名の高齡の女性だった。徳江のつくる“あん”は評判になり、店は繁盛するのだが……。壮絶な人生を経てきた徳江が、未来ある者たちに伝えようとした“生きる意味”とはなにか。深い余韻が残る、現代の名作」。(文庫本解説から)

徳江は、元ハンセン病患者である。悲しいハンセン病の体験や差別を受けたつらい体験を通じて若者たちに語りかける言葉が胸を打つ。「私たちはこの世を見るため、聞くために生まれてきた。だとすれば、何かになれなくても、私たちには生きる意味はあるのよ」。感動の一冊となった。

5. 『すき好きノート』（谷川俊太郎）

2012年に発刊された詩集？ エッセイ？ 絵本？ 実にユニークな本である。その帯に「空いているスペースはあなたのもので。あなたとの合作で、これは世界に1冊しかない本になります」とある。いろいろな項目の好きが綴られている。「好きな場所」「好きな俳優」「好きな食べ物」「好きな俳句」「好きな雲」……。次のページは空白になっており、自分の好きを書いて（描いて）いく。子どもは左から、大人は右から開くような仕掛けになっている。

自分発見にはもってこいの本である。

